

呉服屋兼悉皆屋原巨樹がご案内する

京友禅 職人模様

其の一

「世界で最高に美しくシルクを染め上げる技術」といっても過言ではない京友禅。その十五〜二十もある制作工程には、それぞれを受け持つ職人たちがおり、彼らはそのひとつの工程だけに四十年、五十年という時間をかけて生きています。つまり、職人の生きた時間を積算すると、ひとつの商品に五百年、千年という年月がこもるといふこと。ひとりの人間が百年生きたとしても到底たどり着けない領域に、分業である京友禅は到達できるものと考えます。そんな奥深い京友禅の世界へ、職人の仕事を通してご案内します。

京友禅は江戸時代に京都で生まれた染め技法で、宮崎友禅齋という人気の扇絵師を起源としています。京友禅の特徴は、絹の生地をキャンパスに見立て、いかような絵でも自由に描けること。糸目糊と呼ばれる、もち米・糠などを主成分とした防染糊で絵柄を描くことにより、色を染め分けず、絹の生地と糸目糊を使った「塗り絵」をイメージすると分かりやすいでしょう。その染め味の深さに加え、金彩や刺繍との相乗効果は世界屈指の染め技法と考えられます。

友禅染めによってつくられた着物は、振袖、留袖、訪問着などフォーマルの最たる品物として着用されますから、七五三や結婚式など日本人の伝統儀礼に無くしてはならない大切なものです。

◎悉皆屋

まずは「悉皆屋(しっかいや)」と呼ばれる職業についてご説明しましょう。悉皆とは、仏教の経典に出てくる「草木国土悉皆成仏(そうもくこくどしっかいじょうぶつ)」という言葉が語源であり、染め物の世界で悉(ことごとく)何でもやるのが悉皆屋です。悉皆屋は職人ではありませんが、大変重要な役割を担っています。

分業制である京友禅では、悉皆屋が最適な職人を選択し、段取り良く作業を依頼しなければなりません。なぜなら職人の仕事場は京都市内に広く点在しており、この職人の点を線で繋ぎ、京都の街を面として走り回って、京友禅を染め上げるのが悉皆屋だからです。

イメージとしてはオーケストラの指揮者によく似ているでしょう。異なる楽器奏者＝職人を取りまとめながら、最高のハーモニーを奏する指揮者のように反物を染め上げていくのです。



ひとつ興味深いのは、例え全ての工程で「同じ」「ベテラン職人に仕事を依頼したとしても、優秀な悉皆屋が作れば優品が生まれますし、そうでない悉皆屋が作れば駄作が生まれます。職人を有機的にジョイントし、いかに優れたひとつの生命として機能させられるかが悉皆屋の真骨頂なのです。

私・原巨樹は、お客様に着物を販売する「呉服屋」であり、職人たちの間を駆け回る「悉皆屋」でもあります。この両方を担当できる存在が京都においても稀有で、職人技術をダイレクトに、魅力的な商品として皆様にお届けすることができています。

◎下絵職人

京友禅が始まる最初のステップが「下絵」です。その後、糊置き、挿し友禅、金彩、刺繍などの職人がどんなに優れていたとしても、この下絵を変えることができません。下絵が描かれた瞬間に、その着物の運命は半分決まったようなものなのです。

現在私が頼んでいる下絵職人さんは、京友禅全体の中でもトップ2%に入る力量です。デッサンの上手さ、最終的な着姿を考慮した構成など、特筆すべき点は多々あるのですが、ここでは「運筆」の技

術について述べたいと思います。運筆というのは読んで字のごとく、筆運びのこと。下絵職人の中には鉛筆やペンで描く方もおられますが、筆で描く方が線の伸びやかさといい、勢いといい、優れた下絵が描けます。

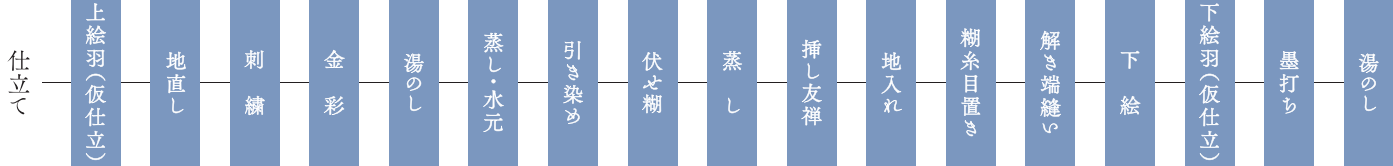
ゴッホは手紙でこんなことを語っています。「日本人は素描(デッサン)が速い。稲妻のようだ。これは神経が細かく、感覚が素直なためだ。僕は日本の絵が持つ極度の明確さをうらやましく思う。急いで描いたようにも見えず、彼らの呼吸のように単純で、まるで服のボタンを掛けるように簡単に描き上げる」。ゴッホをはじめ、当時のヨーロッパ画壇を驚かせた日本の技術こそ、現代の日本画からほとんど消えて、京友禅、西陣織でわずかに継承されている運筆技術なのだと考えます。私が消費者の方からまだ世に生まれてもない品物について、自信を持って受注できるのも最高の下絵職人さんがいてくれるから。そんな下絵があればこそ、続く糊置きの工程でも優れた職人技術が活かされてくるのです。



◎糊置き職人

糊置きとは、下絵の線を糸目糊という防染材料に置きかえていく工程です。京友禅が歴史的にも画期的で、自由かつ緻密な染めを実現できたのも、先にこの説明した糸目糊のお陰です。現代ではこの手描きの糸目糊にも、もち米の糊とゴム糊の二種類があり、私はもち米の糊である「糊糸目」だけを用いた品物作りをして

手描き京友禅
制作工程



糊糸目の場合は、もち米を職人が自分で煮炊きするところから始まり、季節などに合わせて微妙な成分調整をしなければなりません。糊糸目はそもそもモチゆえ、筒から絞り出すのも力を使いますが、女性の力では難しいと言われる重労働なのです。



しかしながら、ゴム糊を使うと石油系溶剤で洗うため、色は冷め、絹の生地が痩せてしまうのに対し、糊糸目は水洗いだけで済むので、むつくりした色味に染まり、生地も良い状態を維持できます。糸目の線そのものも、ゴム糸目が青味を有するのに対し、糊糸目は黄色味で、非常に深い味わいを楽しめます。

何より現場で糊糸目の仕事をする職人と悉皆屋は、誰に聞いても必ず糊糸目を強く推します。ただ、呉服屋においてさえ糊糸目の存在はあまり知られておらず、当然エンドユーザーの方々にもその素晴らしさが伝わっていないので、私は糊糸目の素晴らしさを伝えることが使命だと思っています。

今回は、京友禅の制作工程序盤でお願いする職人の仕事をご紹介します。誰に褒められるでもなく日々、技を磨き、定年もなく目の前の仕事をちよつとずつ改善し続ける。そうして、世の中で名前を売っている作家よりも圧倒的に高い技術を持ちながら、最後まで誰にも知られずに仕事人生を全うする職人達。私はそんな職人達が涙が出るくらい格好良いなと思っこの仕事をやっているのです。

◎原巨樹 (はらなおき) プロフィール 「京ごふく二十八(ふたや)」代表。海上自衛隊で海外を回中、各国の人達が自国文化を自慢気に見ている様子を見たことがきっかけになり、着物を購入し始める。その後、全国の着物産地を回ってみると、着物の小売価格が極めて高いことに対し、職人の収入が驚くほど少ないことが自らの人生の課題となり、呉服屋になることを決意。中間流通を省いた受注生産で、京友禅の製造販売を行っている。

